

詩的感興の発現 言語作用の考察Ⅰ

齊藤 一誠

Expression of "Poesies" --- Linguistic inquiry

Kazunobu SATO

目次

はじめに

はじめに

I 言葉の「引力」について

*言葉が詩になろうとすること、または宮澤賢治

II 言葉の「和力」について

*詩が〈詩〉になろうとすること、または那珂太郎

III 言葉の「斥力」について

*〈詩〉が〈言葉〉になろうとすること、または江代充

おわりに

本論考は、そこでの「おわりに」で予告したとおり、先立つ「詩的感興」の生成――言語作用の観察Ⅰ（追手門学院大学国際教養学部紀要第十四号所収、二〇二二年二月発行）の続稿であり、内容は前稿と対をなしている。元来は一つの論文「詩的感興」の生成と行方」として執筆されたものだったが、紀要掲載時に規定文字数を大幅に超えたため、これを二つに分けて、本文の構成も組み替え、「詩的感興」の生成――言語作用の観察Ⅰおよび「詩的感興」の行方――言語作用の観察Ⅱの二論文として、前者を紀要第十四号に掲載した。今回は後者を本号に掲載する。

ただし、校閲作業中の再考により、本論考に連なる考察は、さ

らに「詩的感興」の変容、「詩的感興」の転回「詩的感興」の躍動」と続く見透しが得られたので、「詩的感興」の行方」と題する論考は、それらの後に、一連の考究全体を総括するものとして置くべきであろう、と着想するに至った。そこで、本稿の論文題は、前稿での予告とは異なる「詩的感興」の発現――言語作用の考察――に変更した。

論考の焦点は、前稿での予告どおり、そこで析出した言葉の「引力」「和力」「斥力」の働きを、△言語作用▽の水準で解明することにある。

I 言葉の「引力」について

*言葉が詩になろうとすること、または宮澤賢治

宮澤賢治の詩は、そのほとんどが推敲途中の草稿のまま遺されている。研究者たちの熱心な校訂を経て、その作品群は、今でこそ、詩や童話にとどまらず、農業指導のためのノートや地質学の研究、さらに集会案内や手帖までも含めて、僅かな追加・削除にまで踏み込んだ校異ともども、微に入り細を穿って活字化されているが²、賢治が生きていた時代に息づいていた詩の言葉の姿はいえは、複雑な推敲の跡を残しつつ未完のまま放置された、あの書きなぐりの草稿群ということになる。生前出版された唯一の詩集『春と修羅』でさえ、賢治自身の手で添削

されたものが、複数冊残されている³。したがって、詩人が言葉を選び抜き、明確な制作意識の下に、充分な時間をかけながら刻苦して、絶妙に組み上げた作品こそ詩である、という観点に立てば、賢治の詩はどれも書きかけであり、詩作品のテキストとしてはきわめて不安定な代物である。そう言わざるを得ない。

では、まったくの無作為にして徒手空拳、ゆきあたりばったりの成りゆき任せで賢治が詩を書いていたのかといえ、決してそうではない。たとえば、こんな走り書きがある⁴。

ワタクシ	アナタノ	メデ	シリマシタ
4	4		7
ア、サウ	アナタハ	ハデ	ワカリマス
サウデス	ワタクシ	ハガ	シルシデス
エ、エ、	アナタガ	アカメナヤウニ	

ここには、音数律についての試考が見てとれる。一行一五音を八音と七音で分かち、それらを重ねてゆくことで詩の基調となるリズムを作りつつ、終結部分では、それまで2+5で作っていた七音を4+3と破調にして、それで詩文にふさわしい落ち着いた感じがもたらされるものかどうか、工夫を凝らしながら実験している様子が窺える。

あるいは、音数律についての意識はまた、こんな鉛筆書きのメモにも露顕している⁵。

3	4	4	3
4	3	3	4
5	5	5	5

ここでは、七五調における七音の構成を3+4と4+3の二通り立て、それに五音を組み合わせて一行をつくるとき、さらにそれらをどのように並べて四行を組み立てるか、という思案の一端を垣間見ることができる。

思い起こせば、これは、時枝誠記が『国語学原論』の第六章「言語美論」の中で日本語における「音声の休止」という現象に注目し、この「休止」が音の「群団化の標識となる」という点こそ「国語におけるリズム群団化の一の重要な方法」としたところに符合する「6」。すなわち、時枝は次の文例を挙げていた。

イセヘナナタビ クマノヘサンド
シバノアタゴヘ ツキマイリ

そして「右は七七七五となっているが、実は三―四、四―三、三―四―五の比によって排列されたもので、右の如き分析は、決して機械的な分析でなく、歌謡そのものの本質に即したものである」「7」と言っていた。賢治もまた、3+4もしくは4+3へさらに五音を加えることを想定しつつ、定型詩そのものの本質に即

して、七五のリズムの妙法を探っていたのだろう。

また、文語詩の音数律については、文語詩「社会主事 佐伯正氏」下書稿の用紙裏面にブループラックインクで記された覚書が興味深い「8」。

文語詩双四聯に関する考察

- 一、概説 文語定型詩、双四聯、沿革、今様、藤村、夜雨、白秋、
- 二、双四聯に於ける起承転結
- 三、格律、短句構成法、
- 四、韻脚、

ここからは、詩作についての方法的な関心と、その具体的な研究方針が読み取れる。

このように、宮澤賢治は言葉の使用について実に細心であり、言葉の作用について探究もし、また詩作の実践においても意識的な配慮を怠らなかった。

そして、もうひとつのメモ「9」。

詩は裸身にて理論の至り得ぬ
堺を探り来る

そのこと決死のわざなり
イデオロギーの下に詩をなすは

直観粗雜の理論に

屈したるなり

ここで「理論の至り得ぬ」と記入された箇所の右側には、ブルーブラックインクで人間の顔等の戯画が描かれているという。確かめてみると、即興の小さな「ポンチ絵」といった画風である[10]。メモの紙面はユーモラス。しかし、「決死のわざなり」という一言は、詩作という行為に身を賭したかのような、切実な覚悟を示して余りある。詩作という行為に対する賢治渾身の思いが、ひしひしと伝わってくる。

宮澤賢治における詩作への意識と探究意欲、その片鱗を走り書きのメモ類から察すればこれらのとおり。とはいっても、ふたたび、こんにち我々の前に手書きのまま残されたあの膨大な言葉そのものの在り様を見れば、賢治の「詩」の実態はやはり書きかけであり、詩作品のテキストとして甚だ不安定であり、言語状況としては極めて不定型^{アモルフ}と言わざるを得ない。

しかしながら、そのような状態の中でも、宮澤賢治の言葉は独自の言語圏を成している。一群の言葉は、そこで「詩」に向かって結集しようとしており、事実、いくつもの詩作品がそこに出来上がっている。あるいは、「集会案内」でさえ、そこでの言葉は、単なる情報伝達の域を超えて、農作業に辛苦する農民に対する思い遣りに満ち、部分的にはあたかも詩文であるかのような趣を呈している[11]。この原動力は何だったのか。

*

素気ない報告体の詩篇草稿二つと『春と修羅』に収められた詩作品一つの観察により、「意味において呼び合う」「言葉の『引力』』という概念を析出したのが、前稿に示した観察結果だった[12]。本稿では、その「引力」が働いている言語場にふたたび注目することになる。不定型^{アモルフ}な言語状況に作用する力。賢治の詩作意識と言語使用の方法に刺激されて蠢き始める言葉群。その領域へ踏み込んでゆくきっかけとして、もうひとつ、報告体の詩篇を心象スケッチ『春と修羅』に見ておこう。「コバルト山地」[13]。

コバルト山地の水霧のなかで

あやしい朝の火が燃えてゐます

毛無森のきり跡あたりの見當です

たしかにせいしんてきの白い火が

水より強くどしどし燃えてゐます

ここでも、叙述の骨格はきわめて単純であるように見える。「水霧のなかで・・・火が・・・燃えてゐます」。ただそれだけのこと。しかし、△言語作用△においては、すでに「水霧」と「火」という意味の相反が仕込まれていて、読者の言語意識を刺激している。相反するものを並べることで得られる効果のひとつは、読み手

の注意力を喚起する作用である。ふたつの言葉が、たがいの意味の類縁を断たれながらも、正反相接する意味のセットとして現れたとき、人の言語意識は微睡から目覚め、警告に反応するように、これに注目する。しかし、意味の「相反」には、「離反」とは違つて、対句表現のような作法で、双方を分かち難い「一對」のものとして提示する効果があるので、そこには「整然たる矛盾」とも言うべき枠組みが出来上がっている。この外形の安定の中で、読み手は内なる意味の「相反」を「この表現には仕掛けがある」というほのめかしとして受け容れ、生理的な反射運動としては、相反する意味の間隙を想念で埋めようと、想像力を発動しはじめる。かくして、詩文に対するとめどない想念の流入が起こり、これが「詩的感興」の発現の潜在力となる。

そして、「場」の提示。「コバルト山地」。それは「毛無森のきり跡あたりの見當」という。人間の心の習慣においては、時間と空間とがセットになった認識の枠組みに支えられていないと、森羅万象を捉えることが絶望的に難しい。だからこの「場」は、読者に向けた仮初めの設定である。すなわち、「コバルト」「山地」「毛無」「森」「きり跡」といった一連の言葉、そのひとつひとつから生じる自然界への連想と幻像が、読み手にそれぞれの詩景を想起させる。だから、この「場」を指示する言葉群は、詩想を抽き出すいわば「序詞」として作用しており、ここにも、「詩的感興」の発現の契機がある。

つづく「火」についての形容。「あやしい」「朝の」という様態

が示され、さらに「せいしんてきの」「白い」という言葉が重ねられる。そもそも言葉は、それが発せられるとき、聞き手や読者に対し、ひとつひとつさまざまな連想を誘うものだ。それには音韻的連想もあれば、観念的連想、類語的連想、反語的連想などもあり、風情に触発された連想もある。その結果、発せられた言葉のまわりでは、聞き手や読者が言語による伝達を成立させる「本義」を定める前に、いくつもの連想が自ずと生まれ、それらが系をなして呼び交わし合い、前兆としての意味が交響をはじめる。しかし、いつしかそれらは互いに呼び寄せ合い、絡み合いながら、ここで言えば「火」にまつわる「意味群」となり、詩行の真ん中にぽつんと置かれた「火」という言葉の「本義」を、ふくよかに限定してゆくのである。ここに、「本義」としての「火」概念が、周囲から多義的な限定を受けつつ、統辞された表現として自立する。書き手による「本義」が、読まれることで生じる予兆的にして副次的な意味を纏いながら、「詩的感興」として発現する瞬間である。そして、「燃える」という現象の描写。ここでは「水より強く」「どしどしどし」という、隠喩と擬態を含む言葉が並べられる。隠喩と擬態とは、聴き手・読み手の自由奔放な連想をあらかじめ制限しつつ、話し手・書き手の意図を伝達するための表現技術であるから、ここで、読者による副次的意味の生成は抑制され、様態の意味場は、言葉によってより直接的に形成される。しかし、言葉どうしの繋がりが、読み手によって生成された浮遊する副次的な「意味群」を媒介にして実現してゆくという、その八言語作

用Vは変わらない。

さらにもうひとつ、「たしかに」という言葉。これが「詩」とそれがつくりなす叙景の全体に、透視画法のような人工の奥行きを与えている。ぶら下がっている言葉の姿は見えるのに、詩篇の中に何ら関連情報がないので、「たしかに」の意味に手が届かないというサスペンス。意味ありげではあるけれども、由来や実態が掴めない詩行中のこの言葉が、読み手の好奇心を惹きつけつつ、遠近法の焦点のように作用して、謎を起点に詩作品の景を拡げている「14」。

*

言葉の「引力」、その正体は何か。語と語の意味の連結が、ただそれらが並べられただけで、何の媒介もなしに起こると考えるのは早計だ。語と語の繋結は、それらが単に並び接するだけで無媒介に起こるのではない。そうではなく、ひとつの語が発せられ、人がそれを受け容れる時、そこにはまず、話し手・書き手が思い描いていた語の「本義」を超えて、さまざまな予兆的な意味が複数の系を成して生じる。統辞に現れないいわば浮遊する「意味群」。そして、この発せられた言葉ごとに次々と生じる「意味群」が互いに浮遊するうちに、その中の「意味」のいくつかが呼び交わし合い、絡みはじめる。それは、意図され企まれた「本義」とは別の、予兆的・副次的な「意味」ではあるが、それを媒介にして、放

たれた言葉がいつそう堅固に繋がり、結びつく。このハ言語作用Vに働いているもの、予兆的な意味を媒介として言葉を繋結する力を、言葉の「引力」と考えたい。

予兆的に浮遊する「意味群」の重なりの中でこそ、あたらしい「意味」が結晶する。それは表立った統辞には現れないが、発せられた言葉と言葉を繋ぐ媒介的な「意味」となり、それに下支えされることで言語表現が成立する。統辞の深層には、このハ言語作用Vが在って、だからこそ、発せられた顕在的な意味とは別の「詩的感興」を喚起する潜勢的な意味も生じ得る。

言語過程において継起しているハ言語作用Vの様態をこのように描写すれば、言葉の「引力」が働く機構を概念的に可視化することができるようになる。そして、宮澤賢治においては、このハ言語作用Vが、詩篇への適用を遥かに超えて「童話」にまで及び、手帖のメモにまで浸透した。その言語圏では、言葉が互いの「引力」によって言葉の順接繋結を果たしながら、「詩的感興」の生成と発現を繰り返している。

II 言葉の「和力」について

* 詩が〈詩〉になろうとすること、または那珂太郎

那珂太郎の詩篇においては、「言葉が繋がり合い、重なり合い、浸潤し合いながら、意味が意味を増殖させてゆく」。これが前稿の

観察であり、その結果として言葉の「和力」という概念を析出した「15」。この言語圏においては、より意識的な言語使用ゆえに、詩は八詩Vであろうとする。明確にして方法的な言語意識が、詩的感興^{じい}の生成を促進する。萩原朔太郎の詩篇について、那珂太郎という「機能美の詩人」¹⁶は「ここで言葉は、説明的でも描写的でもなく、また装飾的修辭法によるのでもなく、ほとんど裸形のまま生動的リズムをなして、ふしぎに鮮明なヴィジョンを造型し得ている」「17」と解き明かしたが、おのれに対してもその格率を課したに違いない。

その緊張から生まれた詩篇を見ておこう。「作品A」、詩集『音楽』所収。その方法について詩人は自ら、「語と語の結合――そこで作者によつて図られたのは、統辭法によつて叙述的に意味を構成することなしに、構文をどこまでも完結させることなく、限りなく語と語の結びつきを展べすすめて行くことであつた。」「18」と回顧していた。いま、詩作の方法との関連を探るため、『詩のこゝとば』所収の「作品の成立」から、詩人自身によるリズム分析が施された形で引用する。

燃えるみどりのみだれるうねりの	3	4	4	4
みなみの雲の藻の髪のかなしみの	4	3	5	5
梨の実のなみだの嵐の秋のあさの	5	4	7	3
	19	17	15	

さびしさのさざなみのなぎさの蛹	5	5	4	3
のくちびるの苔みの罪の冷たさの	5	4	3	5
とぐろのとどろきのおどろきの黒	4	5	5	2
のうつつ観念の唐草模様の錦蛇の	3	5	8	6
夢のゆらぎの憂愁の青ざめる螢火	7	5	5	4
の花びらのかさなりの遠い王朝の	5	5	3	5
の耳かざりのきらめきの水の波紋	6	5	3	3
にほふ肌のはるかなハアの痛み	6	5	3	3

17 18 16 23 21 19 18 17

この作品成立の舞台裏について、詩人は次のように自解していた。「ここで語が次の語を呼び出して連結してゆくのは、たとへば連俳の附け合における『響き』附けのごとく、主として語のもつ音に導かれることが多かったことは確かである。しかし、頭韻・類音を持つ語ならどんな語にでも結びつくかといへばさうではなく、あくまでそこに選択の意識がはたらいてゐたに違ひなく、いはば偶然のきつかけによる語を一語一語ごとに必然と化しながら、語のもつ音のみならず、これが喚起する映像あるいは意味の上での、連関もしくは転移によつて、次の語へつながつて行く」「19」。また、「この作品における作者自身の作詩過程では、一行を大きな

一単位として、それをほぼ同一時間の（物理的にはともあれ、心理的には）うねりとするやうなリズム（そこにこの行分けが必然性をもつ根拠がある）を感じてゐたのであつた。声は音数律に則るのではないから、無論音節数を指折り数へるやうな馬鹿なことはしない。各行はそれぞれおのづから四つに分節されるが、この四分節は一息につなげられるのであつて、そこにことさらな八休止拍√乃至八無音の拍√などは置かない。分節はあくまで心理的抑揚の波動であつて物理的時間の区切りは設けないのである。全篇一つにつながるこの無限旋律にもし呼吸拍を置くとすれば、それは各行の終りでしかないだらう」〔20〕。

那珂太郎において、詩作における言語使用は、かくも意識的に行なわれている。しかし、その成果について、詩人はみずからの試行を評して時に素っ気ない。「ともあれ右に各行各分節の音数を表示したが、それ自体けつしてリズムの内実をあかすものではないえず、これはむしろ自由詩形リズムは単に音数によつて律せられるものではないことを證すだけの、ネガティブな意味合しか持たないだらう」〔21〕。言葉による創造において、方法を索めながら企図した効果に漸近しようとする試み。しばし、この「作品A」を契機として、詩人の「秘法」を八言語作用Vとして考察しよう。

*

あらためて、一行十五文字を十一行連ねた詩篇をゆつくりと読んでみる。そのとき、ただちに肉体を揺らすのは、頭韻によつて連鎖する子音・母音の連なりとその変奏だ。

燃えるみどりのみだれるうねりの
みなみの雲の藻の髪のかなしみの
梨の実のなみだの嵐の秋のあさの
にほふ肌のはるかなハアブの痛み
の耳かざりのきらめきの水の波紋
の花びらのかさなりの遠い王朝の
夢のゆらぎの憂愁の青ざめる螢火
のうつす観念の唐草模様の錦蛇の
とぐろのとどろきのおどろきの黒
のくちびるの苔みの罪の冷たさの
さびしさのさざなみのなぎさの蛹

まず、音の交錯。「燃えるみどりのみだれるうねりの」で始まるM音は、二行目の半ばまで続いたあとで、急にK音に変化する（藻の髪のかなしみの）。そして以後、N音→M音→N音→A音→N音→H音と気忙しく交差する（梨の実のなみだの嵐の秋のあさの／にほふ肌のはるかなハアブの痛み／の）。そして再びM音・K音・H音という冒頭の要素に回帰するかと思えば（耳かざりのきらめきの水の波紋／の花びらのかさなりの）ここにT

音が登場し、Y音があらわれて、母音のAやUやOとともにH音、K音、N音、T音が入り乱れながら色彩豊かな響きを立てる（「耳かざりのきらめきの水の波紋／の花びらのかさなりの遠い王朝の／夢のゆらぎの憂愁の青ざめる螢火／のうつす観念の唐草模様の錦蛇の／とぐろのとどろきのおどろきの」）。そして、行末に「黒」のイメージを置き、次行ではそのK音の響きだけで「くちびる」を導き出して意味の位相を転換させ、「唇」の形状を媒介にして「苔み」を重ね、再びツボミのT音によって「罪」そして「冷たさ」という別概念を呼び寄せる。かと思えば、「冷たさ」の語尾「さ」、そのS音から、改行後の「さびしさの」「さざなみの」を導出し、海のイメージを波音の感覚とともに拡げておいて、突然、「なぎさの蛸」という奇異な連想へ読者を誘ったところで唐突に詩篇を終えるのである。

つぎに、意味の変転。冒頭四行だけを見ても、「燃えるみどり」「みだれるうねり」「みなみの雲」「藻の髪のかなしみ」「梨の実のなみだ」「嵐の秋」「あさのほふ肌」「はるかなハアプの痛み」と目まぐるしい。連想の磁針が回転しているかのように、さだめの無い幻像が提示され、それが「の」という接続辞だけで数珠つなぎに綴られる。しかし四行全体はM音とA音で制御されているので、異なる意味の位相から呼び寄せられているにもかかわらず、それらの言葉は頭韻によって不思議に響き合い、まるで玲瓏たるまばろしのような光景に結晶する。

そして、古言ふるごの残像。「みだれ」から「みちのくのしのぶもぢず

りたれゆゑに乱れそめにしわれならなくに」（河原左大臣）、「藻」から「来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに焼くや藻塩の身もこがれつつ」（藤原定家）、「髪」から「黒髪のみだれもしらずうち臥ふせばまづかきやりし人ぞ恋しき」（和泉式部）といった古歌が目覚め、古意いにしへのこころが幾重にも重なり合う。それが、音色と拍子リズムで枠取られた詩世界の中で響き渡る。

ここにあるのは、音と意味とが唐草模様のように絡みあう、アクトパティフク曲芸的な言語表現の至芸だ。すなわち、まず、頭韻を中心とした音韻の交錯により読む者の身体感覚を覚醒させ、そこに意味を乗せて、意外な連想へと読者を導く。音色の変化を契機に繰り返される奔放な意味の変転も、音の流れという下支えによって拡散を免かれ、かえって生き生きとした詩の世界を形成してゆく。このような八言語作用ハ言語作用の中に、詩的感興ほえじの饗宴けいげんをもたらす那珂太郎の詩法の、方法と化した公理があった。

*

那珂太郎の詩法に特徴的な音韻の変転と拍子リズムを伴った意味の転回、それは、言葉の律動を読み手の身体に呼び覚ましながら、それを支えに、普通にはあり得ない意味の移り変わりを可能にしていた。色ガラスを重ね合わせるような意味の統御と、そこから生まれる見たこともない詩的色彩の現出。意味の展開において、そこにはいくつもの予測不能な裏切りがあるが、その一見意味

をなさぬような言葉の連鎖が、独特な音色と拍動^{テンポ}によって調律され、身体^{スケール}の生命感覚から発した詩的音律を支えにして裏切りによる理の懸隔を乗り越えるとき、言葉のあたらしい繋がりが生まれる。かえって強靱に繫結されるようにも見える。意味の裏切り、あるいは読者の異和感にもかかわらず、言葉が繋がり合い、重なり合い、浸潤し合う。この多重的な言語場にはたらくもの、それを言葉の「和力」と呼びたい。

宮澤賢治の言語圏における言葉の「引力」は、発せられた複数の言葉の「本義」と「本義」を結びつけるが、ここではその繫結を、それぞれの言葉が発せられた瞬間に可能態として生成される予兆的な「意味群」が媒介していた。浮遊する「意味群」から結晶した「意味」が繫結子となって働く「言語作用」^{トナリテ、リズム}。しかし、ここでの意味の連なりは、いわば順接であり、裏切りがなかった。しかるに、言葉の「和力」が働く言語場には、意味の「裏切り」がある。その理の懸隔を乗り越えてゆく力こそが言葉の「和力」である。観念が乗り越えるだけではない。言葉の音韻や拍子に反応する身体^{ふるこ}の律動、あるいは言葉が呼び覚ます古言に誘われた記憶の反響、そんな現象の中で言葉が交錯し、あらゆる意味が互いに浸潤し合う。そこに実現する言葉の「和力」とは、脈絡が無いように見える「言葉群」に向けて意味の多重繫結を促す「言語作用」の原動力と言えよう。

那珂太郎の言語圏において、「和力」の意図的な活用により統御された言葉は、その「言語作用」を通して「詩」であろうとし、

詩的感興^{ほえじい}の重奏的な発現を達成している。

Ⅲ 言葉の「斥力」について

* 「詩」が「言葉」になろうとすること、

または江代充

江代充の詩篇、その日本語としては「破綻寸前」ともいえる文の姿態から、言葉の「斥力」という概念を析出したのが、前稿「詩的感興」の生成における一応の成果である。しかし、その正体については、考察の端緒を示すにとどまっていた。

本稿では、言葉が互いに背き合いながらも「詩的感興」を生成しているという、この詩人独特の言語圏における「事件」の解明に挑むが、その前に、詩人が自ら述べるところ拠ってその言語操作の作法をいささかなりとも明らかにし、江代充の言語意識、その稀有な在りようの一端を観ておきたい。詩集『梢にて』所収の「岸の語り」冒頭部分についての説明。しかし、ここではまず、詩篇の全文を示す。

みずうみにくだる山道を岸まで降りてきた歩幅が
 ならかな地につくとゆるく意識した歩行にながれ
 数歩ずつ自由にあるいては
 そこに留まる姿がいちどきに拡がってみえた

すでに数羽の鷺が白い草のちかくにいて

道から杭で仕切られたみずうみのほとりに寄り添い

なにかの胴に掠められて

水面のはすの茎が

そこで時折り揺れ動くことをたしかめていた

するとハートの輪郭をもった一匹の魚の口もとが

となりの茎のちかくから浮かびあがり

水の間際にその口形を動かしてみせ

ふたつの茎のそばから囚われることなく沈んでいった

『江代充詩集』に併録されたエッセイ「江代さんが読みたい」を書いた上田眞木子は、『梢にて』の数篇を詩人クロード・ミシャールさんと仏訳したことがある」そうで、「訳にあたつて著者に作品の説明をお願いした」という。ここで「岸の語り」に関するその要旨を、考閲の便を期し箇条書きで引用すれば、以下のとおり。

・最初の二行の「降りてきた」と「着く」の動作主は語り手として訳す。

・「ゆるく意識した」の主体はできればほかしたく「ながれ」る主体は歩行である。

・第三、四行は五行目に現れる鷺たちを予告しているのだが、「数歩ずつ自由に歩いた」のが語り手、「そこに留まる」のが語り手および鷺、「いちどきに拡がってみえた」

で感受すべきが内部から外部、単数から複数への（語り手であろう）視線の移動と拡大である。

確かに、このような「読みは著者に訊ねなければ難しい」だろう²²。さらに翻訳の現場では「解説から得た知識で主語をあちこちに補った仏語テキストなど重くて成立しないので、訳者は作者の意図が『伝わるように』ではなく『意図を台無しにしないように』シンタクスを再構成してゆくことにな」ったようだ。そして「訳してみると、江代さんの遅さは光速で交替する視線の屈曲と交差できあがっていることがわかる」と、上田は感想を述べている。「おどろくべきことに、これは統辞の制約がよい散文詩でもかわらない」とも言う。

ここで「遅さ」と言っているのは、江代充の詩篇や散文にしばしば現れるあの特徴、描写された見聞どうしの時間や、記述される動作の主体の食い違いがもたらす、認識上の遅延^{ディレイ}のことだろう。それは、中村鐵太郎が「蒙昧」と名付けたものと変わらない²³。そういう「視線の屈曲と交差」が散文にもあるのかどうか、日録体の『黒球』から一文を引いて、詩と比較しながら点検してみよう。

（七四年）九月一九日

アパートの長い共同洗面所で、わたしは朝早く洗顔した。蛇口から水がながれると、ここの松林の小母さんがいつも

きれいにしているタイル敷きに水がながれ、左側の窓から光が差し込んでいることに気付いた。顔を洗うと小さなタイルが並んでいる。その上を水が何かに浴しながら流れている。そこにある光の性質は、水のようにながれるものではなく、さつきからそこにあるという在り方を見せている。

[24]

江代充はその詩篇「岸の語り」のフランス語訳にあたり、二行目について、動作の「主体はできればほかしたく」と言っていた。また、三行目・四行目についても、そこに記された動作の主体を、語り手、語り手および驚、と揺らしながら、「いちどきに拡がってみえた」については明示せず、むしろ、「感受すべきが内部から外部、単数から複数への（語り手であろう）視線の移動と拡大である」と語っていた。

この主体の輻輳はここに『黒球』から引用した散文でも同様で、おそらく傍線部のようなところが、認識に遅延や醜化をもたらし、日常の言語意識による直読直解を妨げているように思える。

アパートの長い共同洗面所で、わたしは朝早く洗顔した。蛇口から水がながれると、ここの松林の小母さんがいつもきれいにしているタイル敷きに水がながれ、左側の窓から光が差し込んでいることに気付いた。顔を洗うと小さなタイルが並んでいる。その上を水が何かに浴しながら流れて

いる。そこにある光の性質は、水のようにながれるものではなく、さつきからそこにあるという在り方を見せている。

こういった記述の細部が読むという行為にもたらず抵抗、あるいは八言語作用Vにおける意味の屈折、醜化、輻輳といったものを、上田眞木子は「遅さ」と呼び、中村鐵太郎は「蒙昧」と感得した。卒読を阻むこれらの澁み、それは些細なもののだが、言葉の意味を辿ろうとする理にとつては甚だ障害である。実は、ここには言葉が人の意識と観念を未到の認識へとみちびいてゆく、八言語作用V上の果敢な冒険があるのだが、そんな可能性を孕みつつも、この統辞は通常の言語意識にとって、ただ、読みにくさとしてそこに立ちはだかる。

では、いつこれらの部分を取り払ってしまえば散文として明晰になるのだろうか。それを実行してみれば以下のとおり。

アパートの長い共同洗面所で、朝早く洗顔した。蛇口から水がながれると、ここの小母さんがいつもきれいにしているタイル敷きに水がながれ、左側の窓から光が差し込んでいる。小さなタイルが並んでいる。その上を水が流れている。そこにある光は、水のようにながれるものではなく、そこにあるという在り方を見せている。

なるほど、散文の読み味としてさっぱりとはする・しかし、八言

語作用V上の抵抗^{ストレス}が消失した分、日本語という言語界に江代充の言語圏を形成する力が衰弱し(文体の凡庸)、記述という言語際で見れば自立力が減衰し(文章の平板)、表現という言語域においては単なる意味伝達に退行している(文彩の欠如)。主体の輻輳が収束し、言葉の「斥力」が消失したことで、読み手の言語意識に生じる抵抗^{ストレス}を契機とした、詩的感興^{ほえじ}の発現も、また何処かへ行ってしまった。

*

江代充の詩集『昇天 貝殻敷』にある詩篇「貝殻敷」。主体の輻輳の先に言葉の「斥力」が作用する場を予測しつつ、これを読み通してみる。

貝殻敷の道を

パリパリとあるいて見たいとおもい

貝殻敷の冬 一かけらの雲もない

かわいた区域で 石をなめると 不安定な

鳥のすがたを眼にした

一本のマストがあざやかに突きだし

鳥とわたしの関係をあきらめた

わたしは

貝を踏む音をきいた

「あるいて見たい」という行為の主体は「私」であろうが、「鳥のすがたを眼にした」のは「私」なのか、「一本のマスト」なのか。おそらくはその両方でもある。詩という言語表現において、主体はいかようにでも入れ替わり得る。むしろ、言葉という「理解の秩序」から逃れて、統辞におけるその認識主体の揺らぎをこそ追体験させるべく、ここでは言葉が配置されているようにも思える。

そういえば、この末尾三行について、上田真木子は「江代さんを読みこむ作業は、鳥をみとめマストをみとめ、関係を希いながら理解を超えた何かに自分を委ねることに似ている」「25」と記していた。世界というものを秩序立てて認識したいという「希い」を抱きつつ「理解を超えた何かに自分を委ねる」、その態度と姿勢の中から、言語という思考習慣から逃れ出た場での世界認識が可能になる、ということ。

たしかに、人間の認識にとつて世界の秩序とは、畢竟言葉によつて秩序立てられた幻影にすぎない。人間という自然の一部と、その大もとである自然そのもののかかわり合ひは、言うまでもなく、言葉の出現や作用以前の現象である。夕焼けを見て、しかし「夕焼け」という言葉を持たない人間は、一体どのような感慨を持つのか。それはわからない。しかし、人間という生物が宿す心のなにかしらの動きだけは、そこにあるだろう。

それに対し、言葉は、そのような人間と自然との原初的な接触とそこに生じる情動を分節し、それとは別にどこかで分節された

音や観念の体系と仮りそれに重ね合わせる。そして、それらの一対を「コトバ」として△記号▽化する。人間の経験を繰り返して想起するという、その行為を可能にする契機としての△記号▽。それは、自然から離れて、それ自身の体系を打ち立てる。そして、その言語という△記号▽の体系によって、人間は生きている限り不断に押し寄せる原初的な情動からその都度切離され、社会の根底を為す規約、もしくは既に存在する認知・認識の体系の中に追い遣られ囲い込まれてしまう。

言葉による定義以前の情動が連鎖する場、言葉によってたちまち消される言葉以前の領域は、つねに我々の目の前や身の回りに在るにもかかわらず、言葉では認識されていないのだから、いわば言語未到のフロンティアだ。そのような認識の未到地、人間存在の根源的な在り方そのものに、あえて言葉で踏み込んでゆくこと。江代充が詩人としての初めから、言葉の「斥力」を作動させながら、間断なく黙々と続けている試行は、この先駆的で前衛的な実践ではなかったか。

そういう詩人の姿勢が、上田眞木子には「自己への濡れた抒情の不在」と見える。そして「江代さんの作品では『私』に特権化された主観は知覚のレベルにまで削ぎ落とされている。初期作品の多くで、『私』が『既知の主題』をあらわす係助詞『は』でなく、主格助詞『が』をともなう新しい登場人物として現れるのも、『他ならぬ私が』という強調ではなく、『誰かと言われれば何某ではなく私が』という距離感のある主体意識の現れである」とも言

う「26」。世界に対していつでも「私」と名告り[・]をあげることができの特権、それを捨てて、我が主観を単に外界を知覚する行為の起点と化すこと。また、仮に「私が」と言ったとしても、それは自己主張を伴わぬ単なる声の方角にすぎない、とすること。これは「私」が他者と関わるのではなく私が他者であること。私が現実と関わるのではなく現実が私であること」という事態をもたらし、「それを直接記述してゆくなら、私らしさも、私の抒情も入り込む場所はない。時々与えられた認識の場としての視線があるのみだ。」ということになる「27」。

*

では、その視線はなにを見、知覚しようとするのか。突飛なようだが、ここでは前田英樹が『古事記』について述べた「△語▽の区分を持たない、あるいは持つことを許さない言葉によって形成されたある領域」「28」のことを想起したい。『日本書紀』と比較するときに際立つ『古事記』の書記法^{エグリキテ}の特徴を、前田は「一国家の事跡とも、編年体の歴史とも関わりがなく、むしろそういうものから逆流して形成され続ける△天地▽の領域」「29」を表そうとしたことにある、と指摘するのだが、そうだとすれば、これは江代充が目の前の「世界」や身の回りの「日常」に對峙して、あるいはそれを回避して、言葉を紡ぐ姿勢と、時空を遙かに隔つつ、きわめて相似ではあるまいか。

△語Vによる区分に抵抗するある潜在的な言語の領域を平らげ、区分された△語Vによって整然と記された書物に向かって言葉の組織をつくろうとすること。もはや物語として無反省に受容されているけれど、実はかつて誰かによって組織された言葉が投影されているにすぎない、虚像もしくは共同幻想としての、世界なるもの。それを、ヒトが人間にとつての世界をつくりあげている言葉、その言葉自体の働きによって破壊し、人間存在にとつての「△天地Vの領域」を回復しようとする。江代充は詩人としてその地点に立ち、△言葉Vを携えて、言葉の統辞を破壊することをも辞さずに、一新しつづけている。

そこではもはや、言葉の通常の統辞は無効である。いま在る世界という幻影をなぞるだけの規範では役に立たない。かくして江代充は、言葉の条理から離れ、区分された△語Vによって整序される「諸事物の固定した区別」〔30〕、およびそこから恣に捏造される物語の数々に抗って、人間と自然との邂逅によって生まれる原初の情動を、言葉の智慧に解消することを細心の注意を以て避けながら、むしろ言葉の「斥力」によって統辞から外れた△言葉Vで回復し、「△天地Vの領域」に触れようとした。そのとき言葉の「斥力」は、言葉が言葉と呼び意味が意味に纏わりつくことから逃れるために発見された、あたらしい△言葉Vの性質であった。

言葉の意味の順接的な繋がりを拒否するものとして現れる言葉の「斥力」。その発生源は、江代充のきわめて特殊な言語使用にあ

った。主体で言えば、その膿化と輻輳。時制であれば遅延、逆行、分岐、切り貼り。詩的構図の遠近法では不均一、歪み、捻れ、統。統辞の要で発生したこれら言語的「事故」、いや、むしろそれらの「事故」が起きるように配置された遅延生成の仕掛けが、言葉の「斥力」を発生させ、日常の統辞を頓挫させている。

あの予兆的に生ずる「意味群」、副次的に生じて浮遊しながら本義に結晶しようとする「意味群」についても、そこでの意味の輻輳をすら無化してしまう反作用が、言葉の「斥力」にはある。言葉の意味作用を無化するように働く反作用の力。音韻的連想、観念的連想、類語的連想、反語的連想、風情に触発された連想などを誘う連想の系自体が、言葉の「斥力」のもとではもはや成り立たない。しかし江代充の△言葉Vは、そのような言語の通常機能を抜け出したその先の位相において機能し、あたらしい仕方互いに繋がるうとし、言葉の「斥力」は、そのような意味の反発的な繋結を促す△言語作用Vの原動力となっている。

この言葉の「斥力」によって、江代充は、人間の世界認識を、日常言語という△記号Vの体系とは別の位相において回復しようとしたのだろう。したがって、その「詩的感興」は、△詩Vの言葉がその意味を昇華して、日本語の未知の地平を拓くあらたな△言葉Vへと向かう、あたらしいコトバの運動そのものとして発現している。

おわりに

宮澤賢治の言語圏に言葉の「引力」を発見して以来、那珂太郎の言語圏には「和力」を、そして江代充の言語圏には「斥力」を探りあてて、それらの働きを△言語作用▽の水準で考察してきた。そして、統辞において言葉と言葉とが繋がる際に、それを下支えするようにして働く、「発せられた言葉の本義」とは別の、受容によって発生した予兆的・副次的な浮遊する「意味群」を措定することにより、「引力」は意味の順接繋結を、「和力」は意味の多重繋結を、「斥力」は意味の反発繋結をもたらす力と解き、その機構を作品に即して描写した。

「斥力」については、その△言語作用▽が言語という△記号▽の体系そのものを踏み破ってゆく体の働きであったので、論考にあたっては日本語という言語の極北に立たされたような気にもなったが、振り返って宮澤賢治の「詩は裸身にて理論の至り得ぬ／堺を探り来る／そのこと決死のわざなり／イデオロギーの下に詩をなすは／直観粗雑の理論に／屈したるなり」というメモを読み直したとき、那珂太郎を経て江代充まで一筋に繋がる詩魂、すなわち、我はなに故に言葉を用いるか、という詩人たちの矜持が、はからずもひとつの焦点を目がけて貫かれていたことに気づかされ、驚いた。

詩的感興について考察は、「はじめに」で触れたとおり、今

後も「詩的感興」の変容、「詩的感興」の転換、「詩的感興」の躍動」という順で、継続してゆく。

註

- [1] 本論考の表題が、前稿（齊藤一誠「詩的感興」の生成―言語作用の観察）、追手門学院大学国際教養学部紀要第十四号、九三頁。二〇二一年の「おわりに」に予告したものから変更された事情は、本稿の「はじめに」に記した通りである。
- [2] 『新・校本 宮澤賢治全集』、筑摩書房、一九九五―二〇〇九。手書き草稿の克明な複製を基にした厳密な活字化は、一九七九年に刊行された前版においても既に達成されていたが、新版においてより遺漏なきものとなり、本論考はその恩恵に浴した。
- [3] 『新・校本 宮澤賢治全集』第二巻校異篇には、六頁から十頁まで、賢治自身による《手入本》についての解説があるが、そこで挙げられているのは「宮澤家所蔵本」「故菊池暁輝氏所蔵本」「故藤原嘉藤「ママ」春氏旧蔵本」の三種である。
- [4] 『新・校本 宮澤賢治全集』第一三巻（下）本文篇、二六八頁。校異篇の該当箇所八六頁から八七頁には、これが『春と修羅』第二集の黒クロース表紙（D）の表見返2（推定）余白に「鉛筆」で記されているとの記述があり、異文として「1行 ワタクシ ア「タ↓削」ナタノ／2行 ア、サウ 「ワタシハ↓アナタハ」ハデ／4行 ワタクシガ「？」↓ア カメナヤウニ」が挙げられている。二行目の直しを見ると、意味の整合性を配慮していることが窺え、詩作品への試行が感じられるが、用紙の同じ面には同じく鉛筆で「迦莉」「けん」（四箇所、裏面には「蜜」といった書き込みがあるとのことなので、思考の集中が持続しているようには感じられない。熟慮の備忘というよりは、即興的な試考と位置づけるのが妥当だろう。
- [5] 文語詩「岩頸列」下書稿の用紙下部余白に記されているという。『新・校本 宮澤賢治全集』第一三巻（下）本文篇、二七一頁。校異篇の該当

箇所八八頁。

- [6] 時枝誠記『国語学原論・下』、「第6章言語美論」、二二五頁。岩波文庫、二〇〇七年。

- [7] 同、二二八頁。

- [8] 『新・校本宮澤賢治全集』第二三卷（下）本文篇、二七〇頁。校異篇の該当箇所八七頁。

- [9] 『新・校本宮澤賢治全集』第二三卷（下）本文篇、二七〇頁。校異篇の該当箇所八七頁。黒クローズ表紙（B）の裏表紙裏、用紙の左半分に寄せて鉛筆で書かれているという。校異によれば「裸身にて」の原形は「直観もて」。

- [10] 『新・校本宮澤賢治全集』第三巻校異篇八頁、および第七巻本文篇口絵写真・同巻校異編九頁。

- [11] 宮澤賢治が農村で学習会を開こうとしたときの、一風かわった「集會案内」。「集會案内」といえば、必要事項は日時と場所、そして目的と内容、と相場は決まっているが、ここに引用するものには、そういった周知徹底させなければならない連絡事項を大きく逸脱する部分があり、それが「詩的感興」を感じさせて、興味深い。

一、今年は何も悪く、お互い思ふやうに仕事も進みませんでした
が、いづれ、明暗は交代し、あたらしい、歳も来ませうから、農業全体に巨きな希望を載せて、次の仕度にかかりませう。

二、就て、定期の集まりを、十二月一日の午後一時から四時まで、
協会で開きます。日も短しどなたもまだ忙しいのですから、
お出でならば必ず一時までに願ひます。弁当をもつてきて、
こちでたべるのもいいでせう。

三、その節次のことをやります。予めご準備ください。

冬間製作品分担の協議
製作品、種苗等交換売買の予約
新入会員に就ての協議
持寄競売・・・本、絵葉書、楽器、レコード、農具、不

要のもの何でも出して下さい。安かつ
たら引つ込ませるだけでせう、・・・

四、今年は設備が何もなく、学校らしいことはできません。けれども希望の方もありますので、まづ次のことをやってみます。

十一月二十九日午前九時から

われわれはどんな方法でわれわれに必要な科学を

われわれのものにできるか 一時間

われわれに必要な化学の骨組み 二時間

働いている人ならば、誰でも教へてよこしてください。

五、それではご健闘を祈ります。

宮澤賢治

〔新・校本宮澤賢治全集〕第十四巻本文篇八八八九頁。〕

- [12] ここにある「日も短しどなたもまだ忙しいのですから、お出でならば必ず一時までに願ひます。弁当をもつてきて、こちでたべるもいいでせう。」という部分には、事務的な連絡文の中にさえ噴き出す、賢治の村人を思い遣る心情が現れているが、このように、連絡すべき相手の日常にまで深く思いを馳せ、その上で連絡の言葉を届けようとする賢治という言語使用者の姿勢は、人に限らず、おそらく農作物や地質や鉱物といったところから天体、宇宙に対しても変わらず保持されていたように見える。そのような宇宙認識自体が、既に「詩的感興」の源泉として、常時、宮澤賢治の言語使用に作用していたのではないか。齊藤一誠「詩的感興」の生成：言語作用の観察、追手門学院大学国際教養学部紀要第十四号、九三頁。二〇二一年。

- [13] 『新・校本宮澤賢治全集』第二巻本文篇二四三頁。校異篇一四九頁。ただし、『新・校本宮澤賢治全集』第二巻校異篇一四九頁には、『春と修羅』初版本原文に対する賢治の自筆手入れ（宮澤家本）にもとづき、

「せいしんてき」を縦線で消し、代わりの語句を挿入しようと線を引き出しているが、結局、そこに何も記していない」と、修正の様子が記述されている。したがって、あえてこの「せいしんてき」という言

- 葉を選ぶ意外性によって「詩的感興」を喚起しよう、という計算が賢治にあったわけではなさそうだが、しかし、活字となって出版されてしまえば、そうとも読める。詩テキストとしての不安定がもたらす解釈の揺れは、こういうところにも露呈する。
- [15] 齊藤一誠「詩的感興」の生成——言語作用の観察」、追手門学院大学国際教養学部紀要第十四号、八九頁。二〇二一年。
- [16] 荒木亨「那珂太郎に呈する主題と変奏」、「ものの静寂と充実」所収、一二頁。朝日出版社、一九七四年。荒木はここで、みづから翻訳した文化人類学者アンドレ・ルロア・グーランの名著『身ぶりと言葉』の第十二章「機能の美学（感性論）」に触れつつ、那珂太郎を「機能美の詩人」と呼んだ。そして、みづからの言葉でこう述べていた。「日本の現代詩は自らをあらゆる拘束の外に置いた。それは何を書いていいといふことであり、事実何でも書かれ、当然、その総和は瞬間ごとにほとんど零に等しくあつた。これは普通、不幸な状態であらうが、那珂太郎のやうに、生き、書くことの空しさを徹底して見据えて動かない人にとつては、逆に私的パロルからラングを解放する、またとなく豊穣な正立虚像となつたのだ。美の△瞬間△は、ことが『方程式が調和してあるといふ以外に美的根拠のない、物理的な、抽象された単なる定式』にもつとも近づくときに訪れる。」（同書、一一四頁）
- [17] 那珂太郎「朔太郎の詩の概観」、「萩原朔太郎その他」所収、一一・一二頁。小沢書店、一九七五年。
- [18] 那珂太郎「作品」の成立」、『詩のことば』所収、二九頁。小沢書店、一九八三年。
- [19] 同、二九・三〇頁。
- [20] 同、三七頁。
- [21] 同、三九頁。
- [22] 上田眞木子「江代さんが読みたい」、「江代充詩集」（現代詩文庫22）所収一五六頁。思潮社、二〇一五年。
- [23] 中村鐵太郎「詩について——蒙昧一撃」、一五頁、書肆山田、一九九八年。「われわれの『蒙昧』は、日常に見出されるそれとは異なつた経験の身振りの水準における蒙昧であり、認識の水準に『遅延』を起し、経

験記述において『逐語性』を誘い、世界の多様性への自由な親和に対応する。」

- [24] 江代充「黒球」、七〇頁、書肆山田、一九九八年。
- [25] 上田眞木子「江代さんが読みたい」、「江代充詩集」（現代詩文庫22）所収、一五七頁。思潮社、二〇一五年。
- [26] 同、一五七頁。
- [27] 同、一五八頁。
- [28] 前田英樹「マイナー言語というもの」『深さ・記号』所収、三二九頁。書肆山田、二〇一〇年。
- [29] 同、三三二頁。
- [30] 同、三三〇頁。

参考文献

- 宮澤賢治『△新△校本 宮澤賢治全集』、筑摩書房、一九九五—二〇〇九。
- 那珂太郎「詩のことば」、小沢書店、一九八三年。
- 江代 充『江代充詩集』（現代詩文庫22）、思潮社、二〇一五年。
- 時枝誠記『国語学原論・下』（岩波文庫、岩波書店、二〇〇七年。
- 荒木亨「ものの静寂と充実」、朝日出版社、一九七四年。
- 中村鐵太郎「詩について——蒙昧一撃」、一五頁、書肆山田、一九九八年。
- 前田英樹『深さ・記号』、書肆山田、二〇一〇年。